ビジュアルコミュニケーションツールとしてのＩＯＳ
～ 歯科衛生士としての活用法 ～

Digital oral care using IOS by Dental hygienist.

梶原　貴子　Takako Kajiwara
日本臨床歯科 CADCAM 学会東北支部
ライフタウン歯科クリニック（宮城県名取市）

歯科衛生士は日々患者に口腔内の状況を説明しているが、うまく伝わっていないことを実感する場面が多々ある。特に歯周治療は患者の協力なくしてはうまく行かないのは周知の事実であるが、その第一歩として患者自身が自分の口腔内に興味を持つことが重要である。

視覚による情報が全情報の９割を占めるというデータもあるが、患者は自分で口腔内をきちんと見ることは不可能である。もしかしたら私たちが当たり前に見ている部分を患者も見たいのかもしれないということから、Intra Oral Scanner（以下 IOS）を歯科衛生士の私が情報共有ツールとして活用できないだろうか、と考えるようになった。

その後、IOS の画像を患者に見せることで、二つとして同じものがない患者自身の口の中に合わせたカウンセリングをすることが可能となり、さらにはゲーム感覚で色々な角度から個々の口腔内を観察してもらうことも可能になった。模型などのアナログツールでは一辺倒だった OHI も、自分の歯を使ったデジタルツールを使用することで患者も興味を持ってくれ、口腔内について話し合い、画面に触れてみて動かし、一緒に楽しみながらと方向性も変わっていった。

また自分の口腔内を知ることにより、定期的なメインテナンスやセラミック等のよりよい治療を希望する患者も増えてきた。

IOS を活用してクリニックの Digital　transformation 化を実践している私たち医院の取り組みを紹介したい。